

水稻の品種及び栽培様式の 組み合わせによる収穫期間の拡大

1. 試験のねらい

稲作の経営規模拡大のためには、移植時及び収穫期の労働集中を解消する必要があり、そのためには作期の拡大が有効である。品種並びに栽培様式（稚苗栽培、乳苗栽培、散播湛水の組み合わせで作期を拡大した場合の、収穫期間の拡大及び刈り取り適期幅を確認する。

2. 試験方法

試験は栃木農試水田（厚層多腐植質多湿黒ボク土）で、ひとめぼれ、コシヒカリ、月の光の3品種を用い、稚苗栽培、乳苗栽培、散播湛直栽培の3つの栽培様式で平成3年から5年の3カ年間実施した。移植（播種）時期はいづれの年次も5月1日、15日、30日の3時期とした。刈り取り適期の判定は刈り取り時期別の帯緑色初率、玄米性状分析、食糧事務所による玄米の品質鑑定によって行なった。

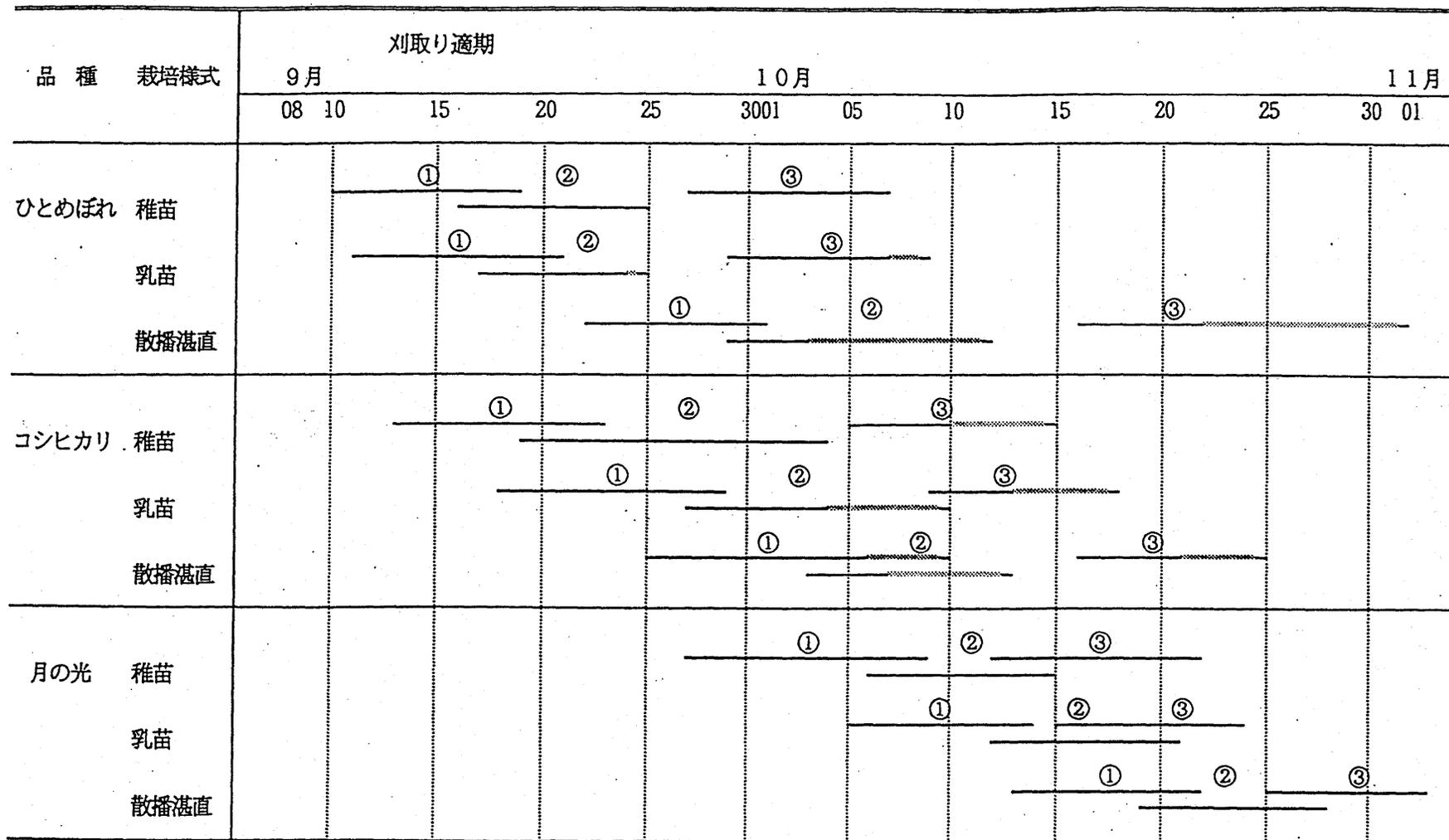
3. 試験結果及び考察

- (1) 品種及び栽培様式を変え、移植時期を5月初～5月末に拡大した場合、収穫期間は9月上旬～11月初の約50日間となり、品種、栽培様式を組み合わせれば収穫を連続して行なえることが明らかとなった。
- (2) 乳苗の収穫適期は稚苗移植に比較して2～6日、散播湛直は10～15日程度遅れた。
- (3) 早生種のひとめぼれの刈り取り適期は、5月初～5月末の移植で稚苗では9/10～10/7、乳苗で9/11～10/7、散播湛直で9/22～11/1であった。
- (4) 中生種のコシヒカリの刈り取り適期は、稚苗では9/13～10/15、乳苗では9/18～10/15、散播湛直では9/25～10/25であった。
- (5) 中晩生種の月の光の刈り取り適期は、稚苗では9/27～10/22、乳苗では10/13～10/24、散播湛直では10/13～11/2であった。
- (6) 刈り取り適期幅は品種によってやや異なり、ひとめぼれ、月の光は10日程度であったが、コシヒカリは10～15日と長めであった。刈り取り適期の帯緑色初率はほぼ15～5%であり、やや早刈りする必要があると考えられた。乳苗や散播湛直では倒伏すると2～9日刈り取り適期が短縮し、適期幅がかなり狭くなった。また移植時期が遅くなると1～2日適期が狭くなる傾向も認められた。
- (7) 出穂前後の天候によって出穂期、成熟期が変動するため、それらの予測と組み合わせて収穫時期の設定を行なう必要がある。また、乳苗及び散播湛直では倒伏を軽くする肥培管理を行なうことによって刈り取り適期幅が拡大できる。8月25日を越える出穂（5月末播種・月の光・散播など）は登熟がかなり低下することが見込まれるため避けた方が良い。

4. 成果の要約

品種、栽培様式を変え、5月初～5月末に移植時期を拡大すると、刈り取り適期は9月上旬～11月初の約50日間に拡大する。乳苗及び散播湛直は、倒伏を軽減することによって刈り取り適期幅を稚苗並に確保できる。

（担当者 作物部 山口正篤・福島敏和・星 一好・小林俊一）



図一 1 品種、栽培様式、移植時期と刈取り適期 (91, 92年平均)

注) ①: 5/1植 ②: 5/15植 ③: 5/30植 ——— 刈取り適期 ————— 倒伏が軽い場合に延長できる刈取り適期